



コンスタンチン・セリョーノフ〈三月の太陽〉1915年
©The State Tretyakov Gallery



イリヤ・レーピン〈空っぽの荷車〉1872年
©The State Tretyakov Gallery

最近、日本はロシア・ブームだといわれています。先に紹介した歌声喫茶は、最近復活の兆しを見せているようです。そして何よりも、亀山郁夫氏によって新しく翻訳されたドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』や『罪と罰』がここ2、3年に相次いで出版され、ベストセラーを記録しているという事実があります。ドストエフスキーも、実は今回の展覧会出品作が描かれた時代の作家なのです。これほどドストエフスキーが注目されているのは、今の日本の社会状況に、彼の生きた時代のロシアが重なっているからなのでしょう。今展で、特に印象深いのは、ロシア、という国を画家たちが常に意識し、それを画面に塗りこめていることです。ロシア人としての自分を見失わないこと、それは、私たち日本人が日本人としての自分を見失わないことを思い出させてくれます。ドスト

また、交友関係も広がったパーヴェルは、レーピンやクラムスコイに肖像画を描くよう依頼もしました。それらの作品は、いずれも偉ぶったりすましたりした、いわゆる肖像画然としたものではなく、むしろスナップ写真のような親しみやすいものになっています。中でもツルゲーネフ、トルストイ、チェーホフらの肖像画は、祖国の誇るべき同胞として描かれています。恐らく、トレチャコフ自身の注文によるものなのでしょうが、同時代ならではの空気をそこに感じとることができます。それはまた、ロシアにおける肖像画の発展においてたいへん意義のあることでもありました。

講演会

「革命か、神か—ドストエフスキー『罪と罰』の時代とグローバル社会」

講師：亀山郁夫氏

(東京外国語大学長、ロシア文学者)

日時：10月31日(土) 午後2時から

場所：美術館多目的スタジオ

※入場無料



イリヤ・レーピン
〈レーピン夫人と子供たち「あせ瀧にて」〉
1879年
©The State Tretyakov Gallery

エフスキーの小説は、あるいは現代の私たちに警笛を鳴らしているのかもしれない。
さあ、『罪と罰』の主人公、ラスコーリニコフの苦悩を思い出しつつ、おなじみの「灯」などを心の中で歌いながら、展示室へようこそ……。

(当館学芸員 菅野 洋人)



イリヤ・オストロウーホフ〈黄金の秋〉1886年
©The State Tretyakov Gallery



フィodor・レベデーフ〈漁師〉1870年
©The State Tretyakov Gallery